

オオツノヒツジの QOL 向上を目的とした施設移動の実施とその評価

○半澤 紗由里
(横浜市立金沢動物園)

2018年4月時点で、個室数8室のオオツノヒツジ舎で雄6頭、雌6頭合計12頭のオオツノヒツジ (*Ovis canadensis canadensis*) を飼育しており、スペースに対して頭数が多いことで、闘争による受傷などの問題が発生した。そこで、動物のQOL向上を目的として、空き獣舎となっていたスペースへ、雌群を移動させた(第12回関東東北・北海道ブロック動物園技術者研究会にて報告)。

移動前、問題となっていたことは、①通年雌雄同居であったため、繁殖シーズンには雌が複数の雄に追い回され疲弊すると共に、出産・育児が毎年休むことなく繰り返されていたこと、②弱い個体の逃げ場確保が困難で、雄同士の闘争による受傷が増えたこと、が挙げられる。雌雄を別居としたことで、計画的に繁殖計画を立てることができ、雌の出産間隔を空けることができるようになったと共に、雌や餌を獲得するための雄同士の闘争も減り、受傷事例は減少した。

オオツノヒツジ展示場は擬岩を模した展示場(以下、岩山展示場)であるのに対し、雌群が移動した先の展示場は草地(以下、草地展示場)であり、その結果、動物が自ら草種を選択して採食する様子が確認できた。その結果、行動観察により得られた採食時間の割合は、岩山展示場で、給餌された牧草のみを採食する雄群が12%であった一方、草地展示場の雌群は自由採食が可能で、55%にもなり、野生のオオツノヒツジの観察事例(Ruckstuhl, 1998)を上回った。草地展示場では、雌群の移動に合わせて植生調査を開始したが、開始当初の2018年と翌2019年では採食されている草種に変遷が見られた。これは、嗜好性の高い種が消滅していることを表している。長時間の採食行動を誘発する草地を維持するため、輪かん展示や牧草の播種を行い、その影響を緑被率の調査で行った。緑被率は画像処理ソフトImageJで行い、展示状況による緑被率の変遷が確認できた。